

18 もくぞうじぞうほさつはんかいぞう 木造地藏菩薩半跏倚像



指 定 県 宝 昭和44年 5 月15日
 所在地 根 々 井
 所有者 正 法 寺



本像は^{ひのき}松材の寄せ木造りで、^{うちぐ}内彫りを施し彫眼で、彩色している。

円頂で、衲衣の上に袈裟をまとい、牀に寄って左足を踏み下げ、右足を屈してその足背を左足の股上に置くところの半跏趺坐とし、左肘を^{ひじ}屈げて、左膝上で掌を上に向け、五指を軽く曲げて持物（宝珠）を捧げる形をとり、右肘を曲げて右前に出し、掌を内にして物（^{しやくじょう}錫杖）を執る形をとっている。本像にはもと胡粉地彩色を施してあったが、今は彩色が剥落し、わずかに彫眼および衣の襞の凹部に胡粉地の跡を残しているにすぎない。

制作年代を示す銘記はないが、眉の根本太く末細まり、両目汲形で半眼に開いた俯瞰の相は鎌倉様彫刻の特色を示している。ことに円頂から両頬を経て顎に至る両曲線は、円をわずかに縦長にした美しい楕円形を描き、これに応じて両肩が描く自然の円弧はよくこれに調和している。肉どり豊かでも力が満ち、膝の厚み、体部の厚みにあまって、力強くしかも安定した像である。

衣紋のたたみ方はやや複雑であるが、その手法は平安時代（794～1184）のおだやかなおもむきを示しながら、大胆で、且つ細心の注意をはらわれていて、全体的にまとまった姿をしており、制作年代は鎌倉時代初期と推定されている。

法量は頂から足下まで130cm、頂～顎25.8cm、髮際～顎21cm、面幅18cm、面奥21cm、耳張り18.4cm、肩張り42cm、肘張り64cm、胸厚23cm、膝張り77cm、坐奥49cm、裾張り76cm、裳裾奥行15cmである。